

蘇芳集

外歩き

青山

丈

八月の水を九月の庭に打つ
いつもとは別の花野で暮れてゐる
目の前とその先の蓮破れてゐる
外歩き今日は水引草を見に
よその家には凌霄の花が咲く
茸山より人ひとり降りてくる
子規庵の近くの家の秋簾

紫陽花

富田正吉

紫陽花を遠く離れてまた思ふ
紫陽花の前で素直になる時間
紫陽花の申し分なき数ならむ
紫陽花の濃きも淡はきもこの世かな
紫陽花を怖くなるまで見てゐたり
あぢさゐの満を持すとはこの色か
誠とて及ばぬ父の日なりけり

小暗がり

野路斉子

小鳥来てすぐに意に添ふ水たまり
色鳥の水浴ぶ水のある限り
街の灯のどよめきに居て月を待つ
ぱつと道拓けてそこが月の道
ひたひたと足音月の供筒向かう
十五夜の供物頒け合ふ小暗がり
年寄りには年寄りらしく敬老祭

あづけおく

別府

優

水中花

松原

ふみ子

沖繩忌返書分厚く届きけり
あづけおく余命泰山木の花
ちちははの戒名なぞる凌霄花
にぎやかな老人の居て夏祓
体操に精出す四万六千日
鰻屋の浦波荒るる二階かな
家中の思ひおもひの昼寝かな

手のひら

前田

陶代子

まつり

峰岸

よし子

睡蓮の白きは人を佇しむる
葉らん勢へる七月の滝しぶき
鳥翔ちて杭の残れる我鬼忌かな
万緑の真中の水面とふしづか
合歡の木に合歡咲くけふの色つくし
合歡咲いて野の端といふ抛りどころ
洗面の手のひらうすし夏深し

枝打ちの済みたる山や祭笛
たそがれの水にきてをりまつり鱧
にぎやかに星出て祭果てにけり
螢火を雫のやうに掌に受くる
光年の星満天に端居かな
ははもかく寂しかりしか籐寝椅子
金魚掬ふ紙のいのちの沈みけり

金魚のねむり

宮尾直美

灯を消して金魚のねむり嬰の眠り
冷麦の昼餉や父母の世を遠く
メロン切る五人家族といふ遙か
炎天の一步は奥歯嚙む思ひ
金魚の荷積まれてをりぬ島渡舟
島の灯を遥かにしたる夕涼み
空ふかく晩夏の蝶の行方かな

土用あい

八木下末黒

ポンプ井戸押すと水出る朝ぐもり
勤行の朝の水打ついしだたみ
山門の佳き松傾ぐ土用あい
店開くキッチンカーの氷旗
西新井大師大屋根灼くるかな
南無阿弥陀仏大暑の塩地藏
錦鯉いろを揉みあふ我鬼忌かな

八月の雲

吉田幸敏

メトロ出て地上ライブや夜の秋
身ほとりの蓮の崩れてより無音
子別れの鳥にふつと風の息
定型を一気に崩すかき氷
暗室に八月の雲発現す
フィルムに白き雨降る広島忌
その日を話す八月を知らぬ子に

風鈴

小川美知子

夏野行く前と後ろになりながら
滝を見てみて足許を掃かれるよ
家に帰ると風鈴が鳴つてゐる
家にゐてだんだん暮れる夏の暮
風鈴と体温計が順に鳴る
つりしのぶ自分の齢が他人事で
夏ゆくと微熱の両手洗ひをり

空すでに

木内憲子

七月の風ある方へ歩きけり
年寄りの話ときどき逸れて夏
蜘蛛の囿の蒐めるものは光りけり
何か話す為に涼しく人と会ふ
字を書きて読みて大暑の日なりけり
空すでにきのふと違ふさるすべり
箸洗ふ水の勢ひも晩夏かな

涼しさに

小島みつ如

娘よ今朝は光あふるる百合の庭
尼様の読経ソプラノ片白草
娘の化身か庭めぐる青あげは
一鳥も一舟もなき海猛暑
『田園』聴く目つむれば青田原
青田風切る自転車通学ふと
写経励む介護施設の涼しさに

ワイングラス

清水裕子

誕生日来るよまつ赫な薔薇が咲き
翻訳の一書繙くパリー祭
ワイングラス大暑の影を卓に引き
奔放に黄の薔薇が咲く名も知らぬ
尺蠖の枝移りしてなほ一途
ベランダを掃いて序でにトマト挽ぐ
家ぬちのひとりの音も夜の秋

泰山木咲く

下平直子

師を父を恋へば泰山木咲けり
水打つて菓舗の朝礼始まれり
ゆるやかに蓮の葉戦ぐ浦日和
何か跳ね蓮の浮葉の裏返る
老鶯の声つややかに湖を超ゆ
風の出て茅の輪少しく歪みけり
青蘆に風生れ帰心にはかなる